

H27-B-4' 深度23.97~24.42m 破碎幅 (No.129) の変更

- 従前提示していたデータでは性状一覧表に破碎幅を34.0cmと記載していたが、以下のことから、18.9cmが正しい値であるため、34.0cmから18.9cmに変更した。
- コアを再観察したところ、破碎部の区間長が長く実測できないことから、図化し算出した結果、破碎幅は18.9cmであった。
- 従前提示していたデータである幅34.0cmは、破碎度区分毎にコア観察カードに記載されたコア長と真幅が混在した合計値 (230+25+50+35=340mm) であったため、図化し算出した値に変更した。

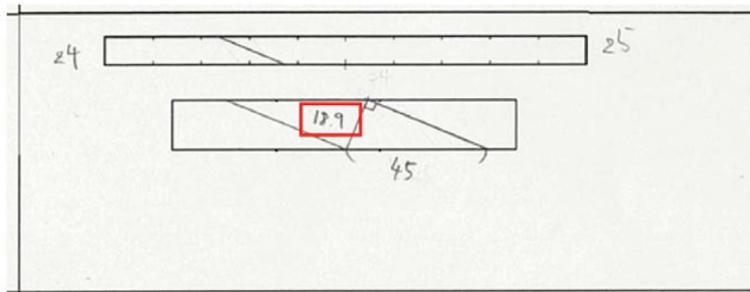
破碎幅算出資料(H27-B-4' 深度23.97~24.42m)

・破碎部の区間長が長く、破碎幅を実測できないことから、図化した資料から算出した。
 ・算出した破碎幅は18.9cmである。

コア写真



凡例
 ← → 破碎部範囲
 代表補料取得位置
 ※: 写真上は白色で記載



破碎幅算出図

該当箇所のコア観察カード

・23.97~24.42m: 破碎帯 (主断面24.24m)
 ・23.97~24.20m: H1
 上端60%弱IT5、下端70%大IT5に連続。2種目Eの中
 5~20%各層の層間の粗さ一部20%弱IT5に粗混の
 層状。1.0の真径~圧縮色白層。幅は可算で230mm
 ・24.20~24.24m: Hc-2
 上端70%大IT5弱IT5、下端75%大IT5に連続。φ2.5
 %石英粒と粗さ250μm以上10~20%程度含む。固結した
 圧層(2.0%弱)~下端側3~5%は明黄色(2.0%弱)幅は225mm
 ・24.24~24.33m: H1
 下端70%大IT5に連続。φ10%前後のIT5に粗混の層(の
 若干の粗さ)。上段側の粗さ多い粗混の層状。明確な
 層。幅は可算で40~50mm
 ・24.33~24.37m: Hb
 下端側圧層(24.34m付近)に連続。粗さ30%程度含む
 碎粒粗さ。1.0の真径(101.8%)と1.1。幅35mm

赤の下線が幅の記載



1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・破砕幅を2.3cmに変更（No.130）

【理由】コアの再観察により破砕幅を計測した結果、破砕幅は2.3cmと判断した。

【断層連続性評価への影響】なし

2. 変更箇所

a 破砕幅の記載を「2.3cm」に変更（No.130）

H27-B-4 深度29.74~29.78m 破碎幅 (No.130) の変更

- 従前提示していたデータでは性状一覧表に破碎幅を3.7cmと記載していたが、以下のことから、2.3cmが正しい値であるため、3.7cmから2.3cmに変更した。
- コアの再観察の結果、破碎幅は2.3cmであった。
- コア観察カードに破碎幅の記載が無く、従前提示していたデータである3.7cmは破碎部の区間長を真幅と誤って記載していたと推定される。

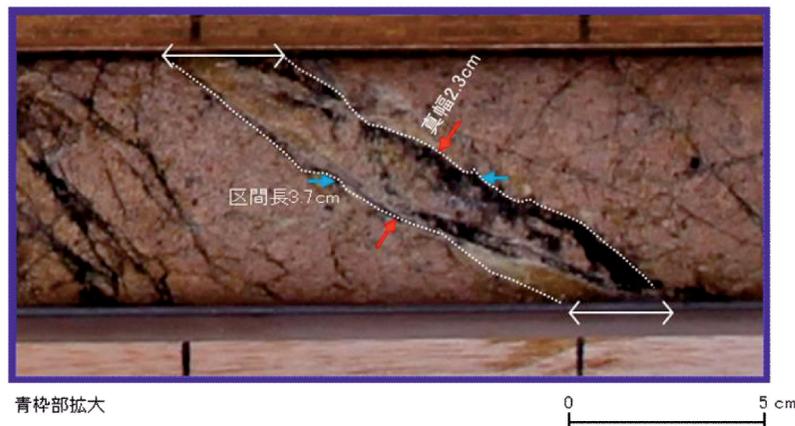
破碎幅算出資料(H27-B-4 深度29.74~29.78m)

・実測した破碎幅は2.3cmである。

コア写真



凡例
 ← → 破碎部範囲
 ※:写真上は白色で記載



青枠部拡大

該当箇所のコア観察カード

29.74~29.78 此の範囲で破碎部 全長が 白色枠と
 下盤67° マニカニシテ梁頭着 上盤側は 幅ノ狭ム一帯と
 度ニ伴フ。

破碎幅の記載は無し

凡例
 ← → : 従前の破碎幅
 ← → : 変更後の破碎幅

1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・最新活動面を65.65mに変更 (No.131)

【理由】再観察の結果、深度65.65mのせん断面を最新活動面と判断した。

・走向・傾斜をN1W80Wに変更 (No.132)

【理由】最新活動面の深度の変更 (No.131) により、走向・傾斜をN1W80Wに変更した。

【断層連続性評価への影響】なし

2. 変更箇所

a 最新活動面の記載を「65.65m」に変更 (No.131)

b 走向・傾斜の記載を「N1W80W」に変更 (No.132)

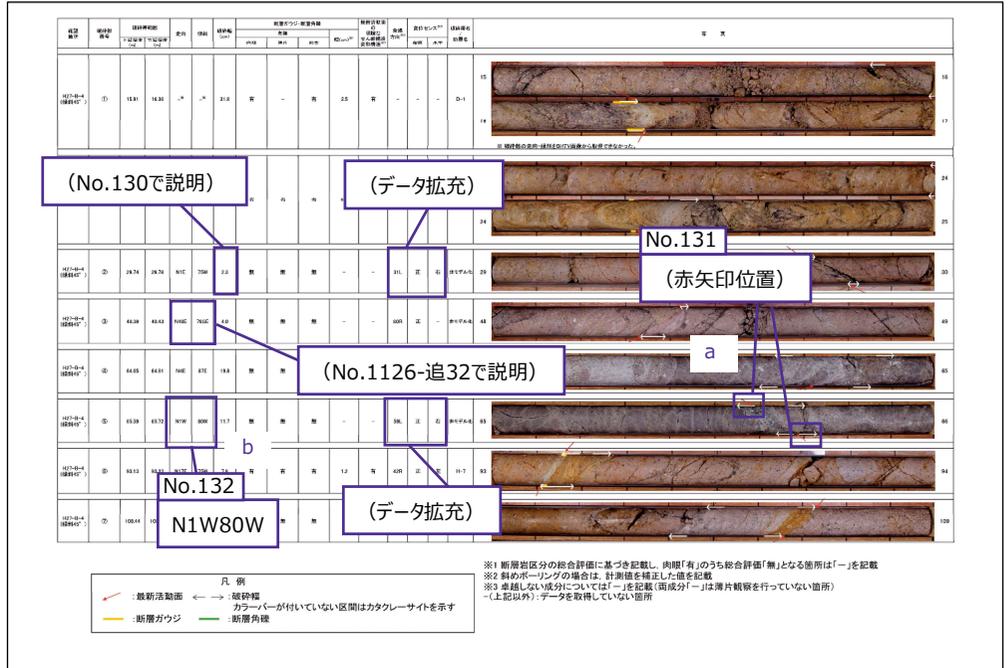
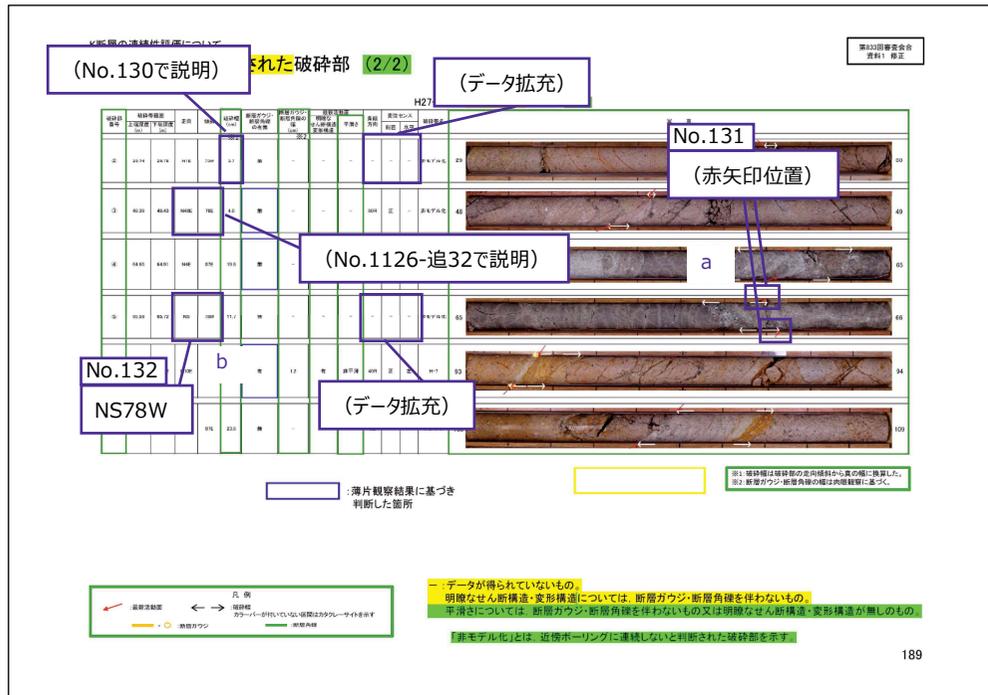
H27-B-4 深度65.59~65.72m 最新活動面 (No.131) を変更、それに伴い走向・傾斜 (No.132) を変更

従前

見直し後

令和3年7月16日提出
 敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について (コメント回答)
 189頁

令和3年7月16日提出資料に追記(青太枠)



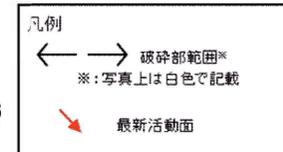
H27-B-4 深度65.59~65.72m 最新活動面 (No.131) を変更

- 従前提示していたデータは、最新活動面の深度を65.72mとしていた※が、以下のことから、深度65.65mが正しい値であるため、最新活動面の深度を65.72mから65.65mに変更した。
- 当初のコア観察カードには最新活動面の記載が無く、深度65.72mに部分的な粘土脈の記載があったことから、深度65.72mを最新活動面としていたが、その後のコアの再観察の結果、深度65.65mに細粒部を伴い、より直線的なせん断面があったことから、深度65.65mを最新活動面として認定した。
- 従前の作業プロセスでは、今回の元となるデータに相当する記録を作成していなかったため、根拠がトレースできなかった。
- ※当該破碎部の最新活動面は、第833回審査会合資料 机上配布資料2の性状一覧表に記載はなく、令和3年7月16日提出の本編資料の性状一覧表に記載していた。

最新活動面認定根拠(H27-B-4 深度65.59~65.72m)

・細粒部を伴い最も直線的であることから、深度65.65mのせん断面を最新活動面に認定した。

コア写真



深度65.72mに明瞭な細粒部は伴わない。



青枠部拡大

0 5 cm



青枠部拡大

0 5 cm



該当箇所のコア観察カード

65.59~65.72m 破碎部範囲10cm以内の性状
 65.59~65.72m 部分的に灰白色粘土
 65.72~62m 部分的に灰白色粘土
 明瞭なせん断面無し

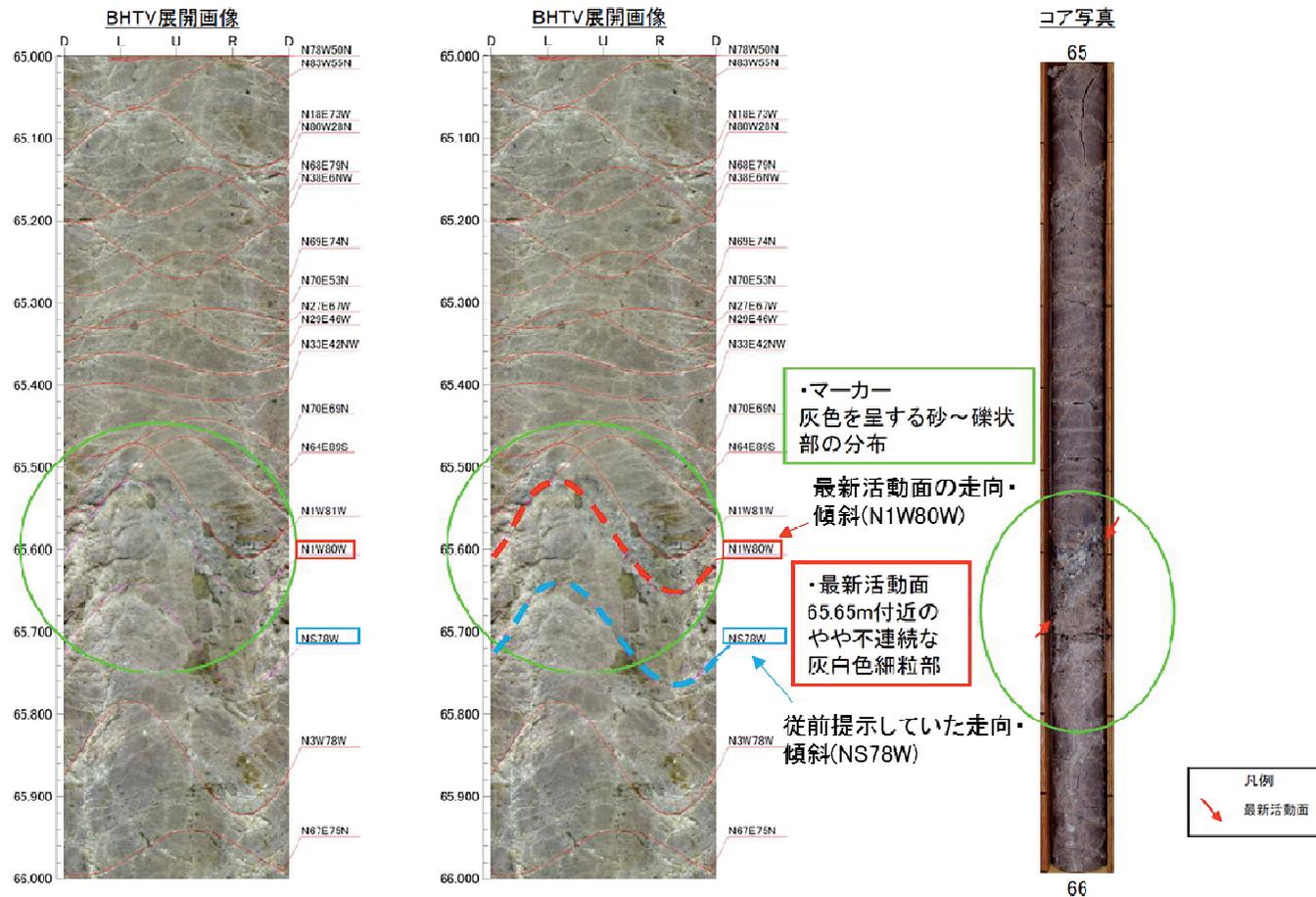
最新活動面の記載なし

H27-B-4 深度65.59~65.72m 最新活動面 (No.131) の変更に伴い、走向・傾斜 (No.132) を変更

- 従前提示していたデータでは、性状一覧表にNS78Wと記載していたが、最新活動面の深度を変更したことから以下のとおり走向・傾斜をNS78WからN1W80Wに変更した。

ボアホールカメラ展開画像との対比結果 (H27-B-4 深度65.59~65.72m)

- H27-B-4 深度65.59~65.72mの破碎部の最新活動面の走向・傾斜はN1° W80° Wである。



1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・走向・傾斜をN17E75Wに見直し (No.133)

【理由】BHTV展開画像にて正しい位置の走向・傾斜を読み取った結果

・条線方向を42Rに見直し (No.134)

【理由】走向・傾斜の見直し (No.133) により, 基準方位が変わることに伴う変更

【断層連続性評価への影響】なし

2. 変更箇所

a 走向・傾斜を「N17E75W」に変更 (No.133)

b 条線方向を「42R」、レイク角を「42°南傾斜」に変更 (No.134)

c 見直し後の走向・傾斜、条線方向に基づく図に変更 (No.133,134)

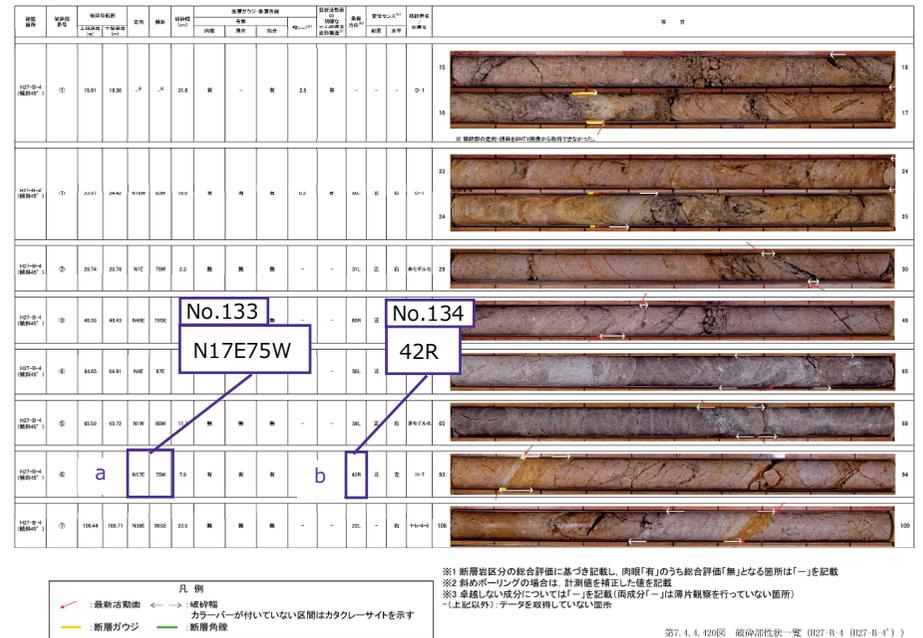
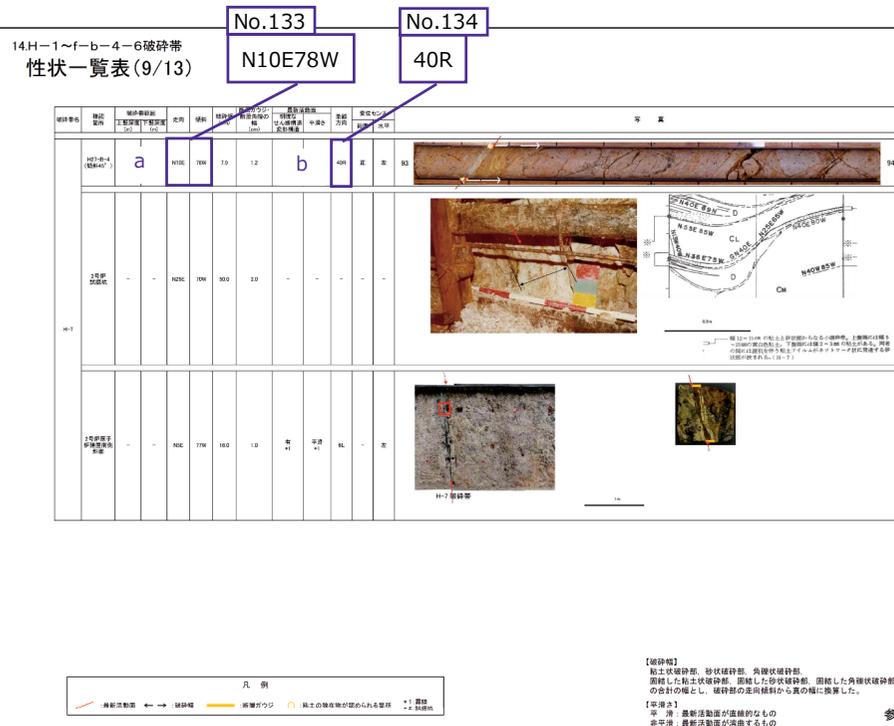
H27-B-4 深度93.13~93.22m 最新活動面の走向・傾斜 (No.133) を変更、それに伴い条線方向 (No.134) を変更

従前

見直し後

第833回審査会合
机上配布資料2
敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について
参考資料2 性状一覧表
参考2-165頁

第833回審査会合 机上配布資料2に追記 (青太枠)



H27-B-4 深度93.13~93.22m 最新活動面の走向・傾斜 (No.133) を変更、それに伴い条線方向 (No.134) を変更

従前

見直し後

第833回審査会合

机上配布資料1

敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について

参考資料1 薄片観察結果

参考1-171頁

第833回審査会合 机上配布資料1に追記 (青太枠)

No.133 No.134

(走向・傾斜 : N10°E 78°W、
レイク角 : 40° 南傾斜
に基づく条線観察結果)

No.133 No.134

(走向・傾斜 : N10°E 78°W、
レイク角 : 40° 南傾斜
に基づく模式図)

No.133 No.134

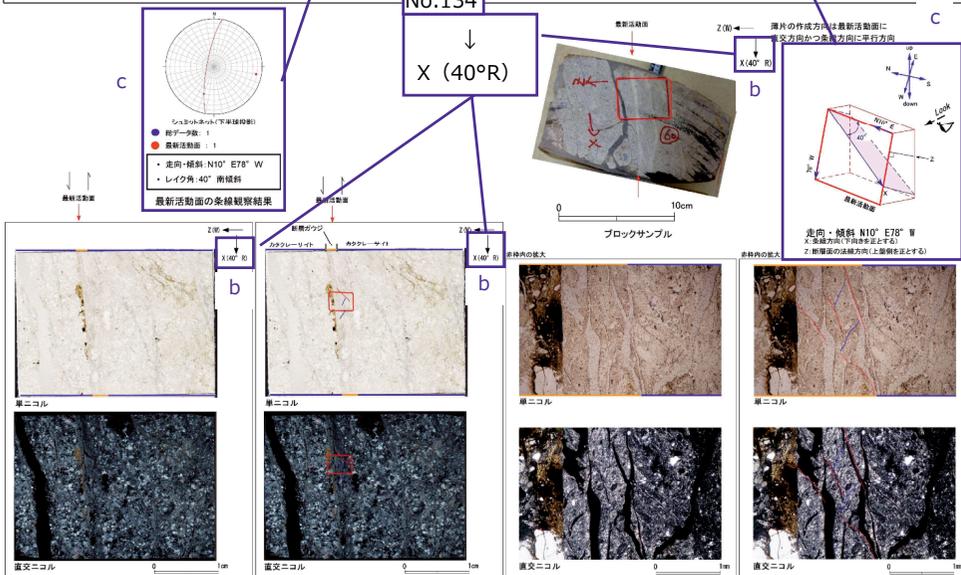
(走向・傾斜 : N17°E 75°W、
レイク角 : 42° 南傾斜
に基づく条線観察結果)

No.133 No.134

(走向・傾斜 : N17°E 75°W、
レイク角 : 42° 南傾斜
に基づく模式図)

H-7破砕帯 薄片試料観察 (H27-B-4 深度93.13m)

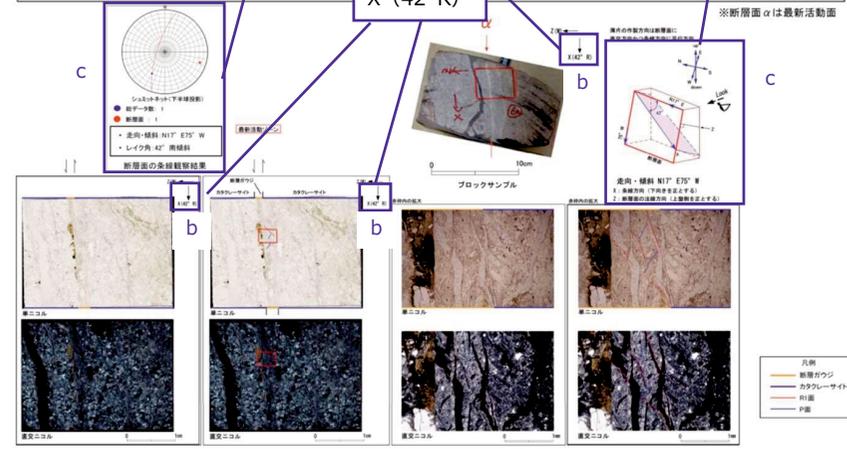
H27-B-4のボーリングコア (深度93.13m) から採取した薄片試料の観察結果。最新活動面の変位センスは、左ずれを伴う正断層である。



参考1-171

H27-B-4のボーリングコアから採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動ゾーンの変位センスは、左ずれを伴う正断層である。最新活動ゾーンには、断層ガウジとカタレーサイトの特徴が認められるが、カタレーサイトの特徴は、カタレーサイトに断層ガウジに取り込まれたものと考えられることから断層ガウジと判断した。

- (断層ガウジ) せん断構造に伴う粘土鉱物の定向配列が認められることより断層ガウジと判断した。
- (断層ガウジ) 基質は粘土鉱物を主体とする。
- (断層ガウジ) 粘土状部の分布は帯状で直線的である。
- 岩片は少ない。
- (断層ガウジ) 丸みを帯びている岩片が多い。
- (カタレーサイト) 岩片の粒界を横断する破断面が認められる。



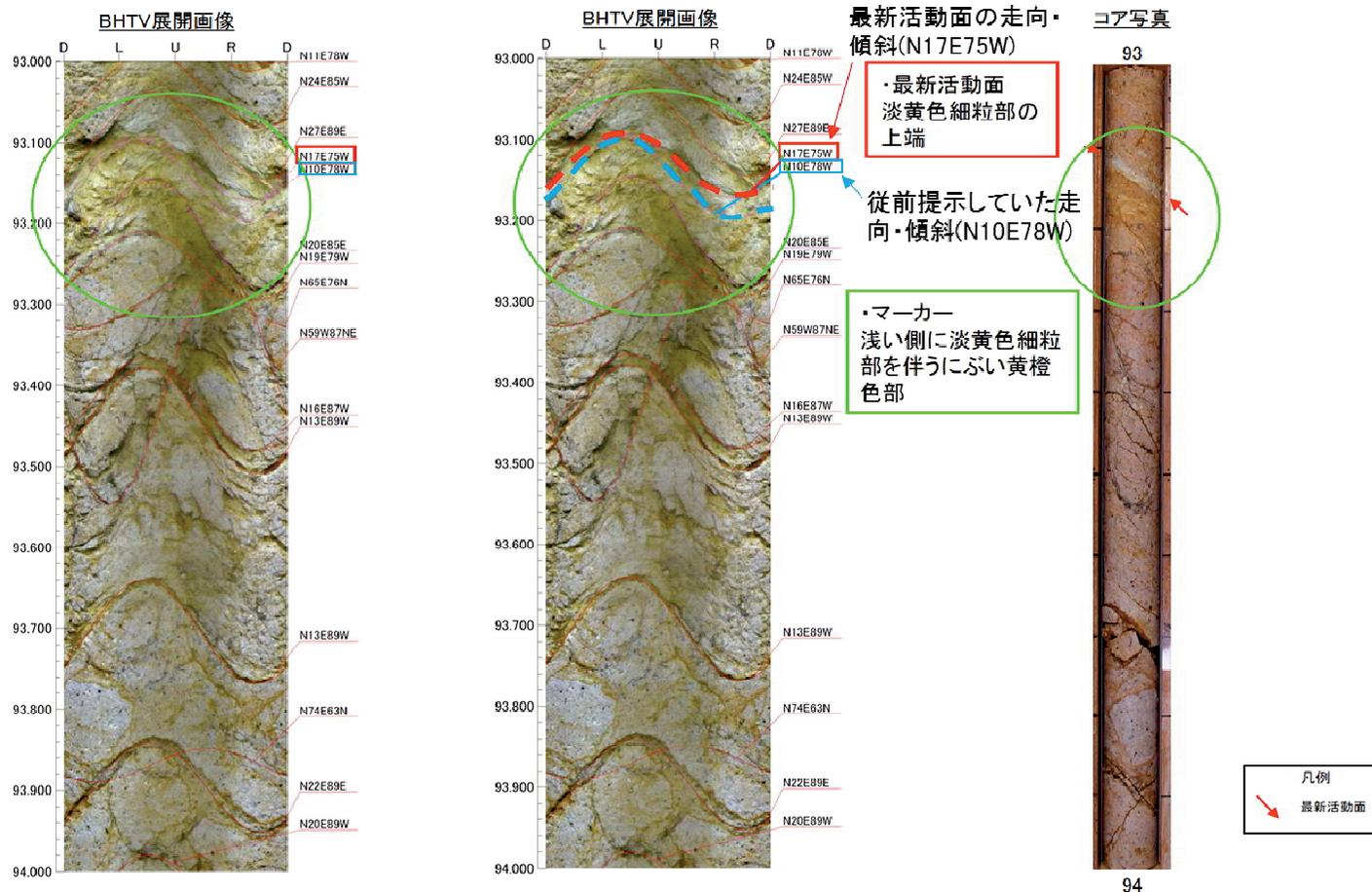
第7.4.4.343図 (3) 破砕部性状 H27-B-4 深度93.13~93.22m (変位センス, 薄片観察による断層区分(1/3))

H27-B-4 深度93.13~93.22m 最新活動面の走向・傾斜 (No.133) を変更

- 従前提示していたデータでは、性状一覧表にN10E78Wと記載していたが、BHTV展開画像からの走向・傾斜を読み誤っていたことから以下のとおり走向・傾斜をN10E78W からN17E75Wに変更した。

ボアホールカメラ展開画像との対比結果 (H27-B-4 深度93.13~93.22m)

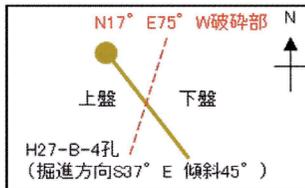
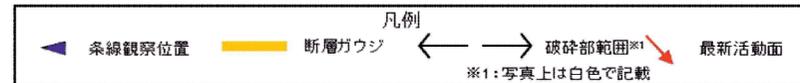
- H27-B-4 深度93.13~93.22mの破碎部の最新活動面の走向・傾斜はN17° E75° Wである。



H27-B-4 深度93.13~93.22m 最新活動面の走向・傾斜 (No.133) の変更に伴い、条線方向 (No.134) を変更

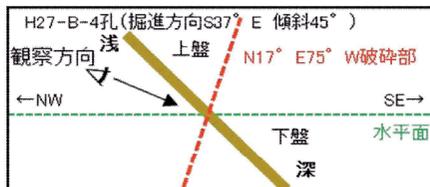
- H27-B-4孔 深度93.13mの断層面の走向・傾斜はN17°E75°Wであり、条線観察は上盤側から実施している。

コア写真



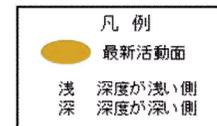
・ボーリングは掘進方向S37° E、傾斜45° で掘削している。
 ・破碎部の走向・傾斜はN17° E75° Wであり、ボーリングと破碎部の平面的な位置関係は左図のようになる。
 ・破碎部は西傾斜であることから、西側が上盤、東側が下盤となる。

図1 H27-B-4孔位置平面図(模式図)



・ボーリング(掘進方向S37° E、傾斜45°)と破碎部(走向・傾斜N17° E75° W)をボーリング孔沿いの断面図で示すと左図のようになる。
 ・ボーリング孔の浅い側が上盤、深い側が下盤となる。

図2 H27-B-4孔を通る断面図(模式図)



※図2で示した観察方向から、最新活動面に正対して描いた3次元的な図

図3 最新活動面と走向・傾斜の関係図